

くらしと協同をたずねてー海外編

01

暮らしの中から見つけたスウェーデン —個人の自律と参加を促す社会とは—

小田巻友子 (立命館大学 准教授)



メーラレン湖の最東部に
位置するストックホルム市庁舎

はじめに

スウェーデンは、東はフィンランド、西はノルウェーと接し、南は海峡を挟んでデンマークと向かい合う北欧の国である。面積は約45万平方キロメートルと日本の1.2倍に対して、人口は約1035万人(2020年6月、スウェーデン統計局)と日本の1/12にとどまる。国土の多くが森林に囲まれており、主要産業は機械工業、化学工業、林業、ITである。世界的に有名なIKEAやH&Mの発祥の国でもある。IMD国際競争力センターの発表によると、2020年のスウェーデンの国際競争力は、世界主要63か国・地域中6位であり、常に上位に位置している。

昨今、スウェーデンは新型コロナウイルス感染症への対応としてロックダウンを実施せず、独自の途を行くことで世界から注目を集めている国の1つである。現在は公衆衛生施策のみが注目されがちだが、日本とは暮らしぶりや各種施策に表れている社会的価値観が大きく異なっている。

筆者はこれまでスウェーデンの就学前学校や障害福祉の現場において観察される専門家・利用者の協働に基づくサービス供給について研究を進めてきた。本稿では、複数回スウェーデンに滞在した筆者の個人的な経験をもとに、スウェーデンの人々の暮らしや施策の一端を紹介していきたい。

スウェーデン人は日光浴がお好き？

緯度が高いスウェーデンにおいて、長く暗い冬を抜けてやってくる夏季は、人々が待ちに待った季節だ。大人たちも仕事を早く切り上げて森や川に遊びに出かけたり、夜な夜なパーティーの音楽が聞こえてくるようになる。夏季の間にたっぷり日光を浴びようと、住宅の庭や公園で、水着姿で日光浴を楽しむ人達の姿が見られるのもこの時期の風物詩だ。夏休みは数週間しっかりと休息をと

り、隣国や避暑地に出かけて、思い思いに家族や友人との時間を楽しむ。同時期に日本の研究者が大学の夏休み期間に合わせて滞在調査しようとする、公的機関も含めてアポイントがとりにくくなるのは誠に勝手ながら悩ましい問題である。

スウェーデンの伝統的な料理といえば、ミートボールが有名だが、スウェーデンの夏に欠かせないのがザリガニだ。8月のザリガニ漁の解禁を祝い、各家庭やレストランでザリガニパーティー（Kräftskiva）が開催される。真っ赤なザリガニを皆ですする姿はシュールだが、その味は意外なほど美味しい。スウェーデンでは、移民の流入の中で和食はもちろんのこと、バリエーション豊かな各国料理が味わえるようになっており、滞在中食事に困ることはない。さらに、筆者がスウェーデンの習慣で驚いたのは、就学前学校¹⁾での乳幼児のお昼寝はベビーカーを使って屋外で行われることである。日光浴かと思いきや、寒さの厳しい冬も外でお昼寝をさせるという。また、雨や雪の日も、レインコートや防寒着を着て幼児たちは近くの森まで連れ立って散歩に出かける。幼少期から自然との触れ合いを大切にするスウェーデンの子育てが垣間見える。凍てつく冬は部屋で過ごす時間が長くなるため、屋内でもくつろげるようにと、インテリアにこだわる家庭が多い。ディナーの際には照明ではなくキャンドルの灯で落ち着いた団欒を楽しむといったように、光のコントラストを上手に暮らしの中に取り入れているのも印象的である。



公園で日光浴を楽しむ人々



伝統的なスウェーデンのミートボールは、クリームベースのソースをかけ、リンゴンベリー（コケモモ）のジャムを添えていただく



友人宅でのザリガニパーティーの様子

個人の自律と参加を促す 社会づくり

自然を愛し、ワークライフバランスを重んじてのんびりと過ごす市民像をスウェーデンに見出す一方で、スウェーデンの政策運営は常に先鋭的である。福祉先進国としても名高いスウェーデンは、市民権あるいは単なる居住を権利付与の基礎として各種社会サービスや保障が受けられる点、そして強力な所得再分配政策と同一労働同一賃金により経済的格差の拡大を長期にわたって抑え込んできた点で、社会政策の実施に関して普遍主義的な性格をもつ国だと理解されている。

一方で、教育・雇用・政治のあらゆる分野で自己の能力の社会への還元とあくなき参加が要求される国でもある。渡邊(2015)では、社会民主労働党党首のステファン・ローヴェン氏(現首相)が演説の一節として、「自分を教育しろ、働き納税しろ、他者の権利を尊重してその上で自己の権利を要求しろ」[渡邊,2015,170]と述べたことを紹介しているが、この言葉は筆者がこれまで体感してきたスウェーデン社会を言い表すうえで、非常に的を射た表現だと感じ

ている。

スウェーデンでは、男女ともに就労率が高く、共働き世帯がほとんどであるため、子育て支援施策が充実している。また、親が求職中や兄弟姉妹の育休取得中であっても、1歳児から就学前教育を受けることができる。リカレント教育も非常に盛んであり、有給の職に就きながら、および公的な奨学金を得ながら新たな領域を学び、より高い専門知識を身に付け、異なる業種に転職していく者も多くみられる。

筆者はスウェーデン滞在中に、職歴が多様な人や複数の肩書をもつ人に数多く出会った。そうした人々に転職の理由を尋ねると、「新しいことに挑戦してみたくなった」という言葉を頻繁に耳にした。こうした決断を促す背景には、現在の北欧諸国に共通してみられる①流動的な労働市場と柔軟性のある働き方(フレキシビリティ)、②所得・雇用保障(セキュリティ)を組み合わせるフレキシキュリティの発想からなる再チャレンジが可能な社会のしくみづくりがあるといえよう。

生活保障の側面では、税金に基づいた公営医療制度が整備されている。待ち時間問題はあっても、患者は一定期間内に無料もしくは安価に診療を受けることができる。障害者は法に基づき地域で暮らし・就労する権利を有する。スウェーデンでは1960年代からノーマライゼーションの理念が普及する中で、徐々に集団型の施設が廃止され、1994年の知的障害者ケア改革、1995年の精神保健福祉改革、1997年の知的障害者施設廃止宣言により[奥村・伊澤,2006]、多くの障害者が施設から在宅に移行した。しかし、所得ではなく必要に応じてサービスを受けられる制度設計の下、障害者が地域で自律した生活を営むことが可能となっている。こうした各種教育・雇

用・福祉制度の発達により、スウェーデンでは血縁関係や世帯としての家族に依存せずとも各自の必要を満たすことができ、個人の自律と社会参加が促されている。

誰もが地域で自律して生活するために：障害者の地域生活を支える社会サービス

このようなスウェーデン社会の特徴を踏まえた上で、本稿では障害者の地域での自律生活を支える社会サービスを1つ紹介したい。前述のように、スウェーデンでは、1990年代の矢継ぎ早な改革の中で施設ではなく地域で障害者が暮らすしくみが整えられていった。その1つとして2000年から本格的に導入されたのが、18歳以上の精神障害者の地域生活を支援する専門職である Personligt ombud (PO) である。POに支援を依頼してくる障害当事者は、生活に何らかの困難を抱えていながら、自らにどのような権利があり、どのような選択肢があるのかを自覚していないことが多い。そのため、POは当事者との対話を重ねながら、当事者の潜在的なニーズを明らかにする。そして、当事者の要望に応じて通院に付き添ったり、一緒に公共職業安定所に行き就労の場を探したり、傷病手当や社会扶助の利用申請の補助をする等の具体的な支援につなげていく。

POにおいて特徴的なのは、支援の開始から終了までどのような支援が必要になるのかは一貫して当事者の決定に委ねられる点である。スウェーデンでは、障害の有無にかかわらず、本人の決定が徹底的に尊重される。加えて興味深いのは、POの多くが行政の職員として雇用されていることである。しかし、POは如何なる時も当事者

の意思を優先し、要望に沿って支援を行うため、時には行政内の他部署の決定を覆しかねない行為（不服訴訟の支援）を起こすことがある。そのような場合であっても、当事者の意向に沿えるように、POは行政機構からの直接の指揮命令を受けない独立した立場を保障されている²⁾。

ただし、POの役割は直接的に当事者の治療やケアの責任を担うことではなく、あくまでも他の専門職や機関に当事者をつなげることである。したがって、POは法律、社会サービスの知識や地域住民・諸機関とのネットワークを持っていることが求められる。さらに、当事者を取り巻く行政・専門家の会議に定期的に参加し、当事者の自律的な地域生活を阻む社会的な障壁を指摘して制度の改変を促すこともPOの重要な職務の1つである³⁾。

このように、一見矛盾した雇用形態と職務が共存しているようにも見えるが、行政内部に行政の変革を促すしくみがあることには、よりよい社会を目指して常なる変革を恐れないスウェーデンらしさを感じる。

おわりに：フィーカと議論

スウェーデン人はフィーカ (Fika) といって、お茶をするのが大好きである。1日に2回ほど職場や学校でフィーカの時間をとる。そのおかげか、筆者もインタビューに伺うと必ずコーヒーや紅茶、加えてお茶菓子をご馳走になった。そしてフィーカに欠かせないのは対話だ。「なぜあなたは経済学を学んでいるの?」「あなたはロマの人々⁴⁾のことをどう思う?」と、時折おしゃべりというよりも議論に近いテーマが投げかけられ、内心ドキリとすることが度々あった。こうしたスウェーデン人の議論を

厭わない姿勢や社会問題に対する関心の高さは選挙の投票率にも反映されている。

スウェーデンでは、選挙の投票率は常に80%台を推移している。スウェーデン統計局によると、2018年9月総選挙における国政選挙の投票率は87.2%に上り、1985年の選挙以来の高さであった。投票率に大きな世代間格差もみられない。同時期の選挙直前まで筆者もスウェーデンに滞在していたが、長い期日前投票の列を見かけたり、広場に選挙小屋が立ち熱心な議論が交わされ、若者たちが音楽を奏でながら歌って選挙に参加している様は民主主義国家のスウェーデンを如実に体現していた。

自分の考えを主張し、他者との議論を通じて、豊富な選択肢の中から自ら決定を下す自律した個人の形成は、まぎれもなく、個人を重んじるスウェーデン社会のなせる業である。みんながどう考えるかよりも、「あなた」はどう考えるか、どうしたいのか、をととても大事にしている。そして、自分たちの決定が社会を動かすことを強く自覚している。この点は、その場の空気を読んで同調することや社会の一部としての個人のふるまいが暗黙裡に求められる日本との違いを感じざるを得ない。

残念ながら、新型コロナウイルス感染症の影響により、しばらくの間国外調査は断念せざるをえないが、渡航が可能となった暁には、今度はどのようなスウェーデンの一面が見られるだろうか。興味深く情勢を見守りたい。



広場に立ち並ぶ選挙小屋



政策談議もお茶を囲んで

参考文献

- 外務省,2019,「スウェーデン王国基礎データ」, <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/sweden/data.html>, (2020年8月24日アクセス)。
- 小田巻友子,2020,「スウェーデンの Personligt ombud にみる福祉サービス供給における利用者主権の取り組み」『立命館経済学』,68(5・6),60-71。
- 奥村芳孝・伊澤知法,2006,「スウェーデンにおける障害者政策の動向－高齢者ケア政策との異同を中心に－」,『海外社会保障研究』,154,46-59。
- IMD World competitiveness Center,2020,“IMD World Competitiveness Ranking 2020” , <https://www.imd.org/wcc/world-competitiveness-center-rankings/world-competitiveness-ranking-2020/>, (2020年

8月29日アクセス)。

Statistics Sweden, <https://www.scb.se/en/>,
(2020年8月24日アクセス)。

渡邊芳樹,2015,「北欧市民と国際社会」岡澤憲
美編『北欧学のフロンティアーその成果と
可能性ー』ミネルヴァ書房,157-175。

注)

- 1) 1～6歳児が通う学校教育機関。
- 2) 民間委託を採用したり、物理的に行政の他部署がある場所とは違う場所にPOの事務所を置くことで、POの独立した立場を担保している自治体もある。
- 3) POについての詳細は、小田巻(2020)を参照されたい。
- 4) 主としてルーマニアからスウェーデンにやってくる移動型民族。スウェーデンの電車内や駅前、商業施設前で物乞いをする姿が頻繁に見られる。